

## 利用者の76%は学生・院生，経費の68%は電子ジャーナル



理事・副学長・附属図書館長 逸見 勝 亮

◇昨年度の『北海道大学附属図書館概要』に僕が書いた「附属図書館と学生」は，図書館職員・図書館委員の間ですら話題にもならなかった。僕との間で拙文を話題にしたのは大塚榮子監事ただひとりであった。監事が「書いてましたね」と関心を示された箇所を再掲しておく。

学生と教員のいずれも附属図書館にとって重要な存在だが，大学に授業料を納入している利用者と，大学が給料を払っている利用者と，どちらがより重要な存在か，これはそう難しい問いではない。

◇2006年度電子ジャーナル費用は約5億円で，附属図書館経常経費の68%にも達した。経費上では言うまでもなく電子ジャーナルが最大の問題である。

附属図書館が昨年12月に実施したアンケートによれば，教員の92%，院生の76%，学生の23%が電子ジャーナルを利用している。「ほぼ毎日」か「週に3～4回」利用している教員は50%，院生は42%にのぼる。電子ジャーナルが研究にとって不可欠な手段であることに多言を要しない。そして，附属図書館が研究情報の電子化にとって重要な役割を担っていることもである。

◇2006年度の附属図書館開架閲覧室利用者は88万人であった。そのうち67万人は学生・院生で，実に76%を占めた。2005年度の利用者83万人と比較すれば，5万人も増加した。要因は，北分館利用学生が2005年度の31万人から36万人に増加したことである。

1年生の利用者は15万人から2万人増加して17万人となった。しかも，北分館利用学生の47%は1年生であった。学生の「活字離れ」「不勉強」を口にする教員は少なくないが，附属図書館利用者数の増加が学生利用者数の増加によっており，それは1年生において最も顕著である。これを強調して過ぎるということはあるまい。ちなみに，学生が北分館を通じて館外へ借り出した図書は，2005年度は6万2千冊，2006年度は7万4千冊，1万2千冊も増加した。これも特筆してよい重要な事実である。

◇上記アンケートで，学生・院生が最も強く求めた（満足度が低い）のは，夏の閲覧室気温調節と新刊図書の充実である。要するに6～9月の晴天には暑く（時に36度！），本はいかにも古めかしいのだ。悔しいが附属図書館は利用者の初歩的期待には応えていない。学生・院生が利用者の76%を占め，しかも増加傾向が顕著であるという，教育機関としては欣喜雀躍すべきほどの事態に際して，利用者の要求に応え，学生・院生の利用をさらに促す方策を選択しないという法はない。僕が考える『概要』刊行の目的は，快適で充実した勉学空間＝閲覧室の実現である。附属図書館が最大の利用者と向き合わなくて何とする。大学が授業料納入者と向き合わなくて何とする。